

日本におけるフィールドホッケーの普及

A study on the spread of Field hockey in Japan

1K04B136-3

田澤 純子

指導教員

主査 間野義之先生

副査 作野誠一先生

1、研究目的

日本でホッケーといえば、ほとんどの人がアイスホッケーのことを思い浮かべる。むしろ、フィールドホッケーというものがあるということ自体、知らない人が多いというのが現状だろう。

このように、日本のフィールドホッケー（以下、ホッケー）は、マイナースポーツであると言える。国民体育大会（以下、国体）の開催によってホッケーは発展していったのだが、「ホッケーの町」と言われているくらい根付いている地域もあれば、国体終了後にはほとんどホッケーが行われなくなってしまった地域もある。

そこで、本研究では、まずホッケーの歴史を示し、日本のホッケーの現状を明らかにする。その上で、「ホッケーの町」と言われている、ホッケーがしっかり根付いている地域の状況を探り、その地域の取り組みを参考に日本のホッケーの現状も踏まえながら、日本でホッケーを普及させるために必要なことについて提言することを目的とする。

本研究におけるホッケーの普及とは、ホッケー競技者の数を増やすことと定義する。

2、ホッケーの歴史

ホッケーは歴史が古く、古代エジプトまでさかのぼる。オリンピックがホッケーを世界に広げる以前の1906年に日本にホッケーが伝えられたとされている。その後、ホッケーは国体組織に育まれることによって着実に組織を増やし広がりをつくってきた。戦前はわずか13都道府県で行われていたホッケーが、平成9年の時点では47都道府県に広がり、全県普及の念願が達せられることになった。これは各地の有志の献身的な努力とともに国体の力が大きい。もし、国体にホッケーが含まれていなかったら、今日のホッケーの普及・発展がなかったといっても過言ではないだろう。

3、日本のホッケーの現状

日本のホッケー競技者数、チーム数は、いまだに多いとは言えないが、女子日本代表がアテネオリンピックという国際舞台で活躍したことにより、ホッケーの選手数、チーム数の増加へとつながった可能性があると言える。また、全国にある人工芝グラウンドは、ほ

とんどが国体をきっかけに整備されたと言える。人工芝がすべての都道府県に整備されたわけではないが、徐々にその数を増やしつつある。

ここでは、「ホッケーの町」と言われている地域を3つ取り上げた。福井県越前町の場合は、「チャレンジスクール」と「チャンピオンスクール」に分かれる段階的な指導と、それに加えて、他の地域のスポーツクラブやスポーツ少年団との共同企画である「くらぶホッケー」による小学校から高校までの一貫指導を行っている。富山県小矢部市の場合は、「たのしいホッケー」と「アスリートホッケー」に分かれており、段階的な指導を行っている。岩手県岩手町の場合は、総合型地域スポーツクラブは存在していない。そのため、他の2つの地域と違って総合型地域スポーツクラブを介さずに多世代参加型の県リーグ、IBC杯、またホッケー祭りなどを行いホッケーへのきっかけづくりをしている。

4、まとめ

「ホッケーの町」の取り組みを参考にホッケーを根付いていない地域のホッケー競技者を増やすことで、日本のホッケーを普及させていけると考えた。この3つの地域に共通していることはスポーツ少年団のチーム数が多く、盛んに活動しており、これらの地域の取り組みは、それぞれやり方は異なっているが全て、ジュニアの育成に力を入れていることである。

これを取り組み方によって分けるとすると、総合型地域スポーツクラブを介してジュニアの育成に取り組んでいる地域と、それを介さずに取り組んでいる地域に分けることができる。

それを参考にして、総合型地域スポーツクラブを介してジュニアを育成していく場合は、段階的な指導を行い、その後一貫指導を行っていくこと、そして総合型地域スポーツクラブを介さずにジュニアを育成していく場合は、多世代参加型の大会、イベントの開催を提案する。これらのことを参考にしながら、地域に合ったジュニアの育成をしていくことが、今後日本のホッケーの普及につながっていくのではないだろうか。

ジュニアの育成は時間を要することであり、目に見える即時的な成果は出にくいので、あきらめず地道な活動をしてほしい。